



千葉県 TEACCH プログラム研究会  
2014年5月10日(土) 第71号

「森」字・佐々木正美  
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県 TEACCH プログラム研究会広報部  
ホームページ：<http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>  
事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS内 TEL.043-227-8557

## 「組織の力を高めよう」

千葉県 TEACCH プログラム研究会 代表 長澤隆壽

障害のある方の多くが乳幼児から成人まで、日中の生活の場を外に置くようになってすでに久しい時代になってきました。それにより、それぞれのライフステージに沿った外の生活の場（施設、学校、職場など）の運営も徐々に充実してきているように思えます。特に利用者の方の特別なニーズを実現すべくソフト面の浸透率は多くのマスコミ等での採り上げ数も増加し、高まってきているのではないのでしょうか。私たちの研究会でいつも最終回に行っている各組織や個人の実践報告会に参加されている方は、その報告内容の素晴らしさから、この喜ばしい傾向を例年実感されていることと思います。

このように温かい気分には浸っていると、突然、寒気に襲われたかのように障害のある方に関わる寒々とした事件報道に接することが、まだまだあります。特に、それらの事件の被害者の多くが発達障害の方であることを改めて知ることができます。いずれもその主たる要因は支援者一人一人の障害特性への理解不足によるものであることは否定できません。しかし、併せて大きな要因の一つとして、その支援者の所属する組織の問題も挙げねばならないと思います。

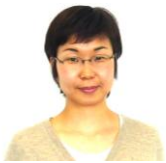
私たちの研究会は支援者個人の資質の向上に資する情報を提供していますが、併せて、障害のある方の生活の場をよりよく運営していくための組織の在り方も含まれている場合が多いです。ですから、こちらの情報にも関心を持っていただき、それぞれの組織の力を高める手立てをつかんで欲しいと願っています。

本年度も千葉県 TEACCH プログラム研究会の運営にご理解とご協力賜りますようお願いいたします。

# 第6回 連続セミナー 実践報告会

平成26年2月15日

H25年度の一年間のまとめとして、セミナーに参加して下さった方々から、それぞれの場所での実践を発表していただきました。発達障害の方たちの気持ち、立場、障害特性に沿いながら、支援者がレベルアップしていきたい!という気持ちからの、実践報告であったと思います。支援されている方たちが少しずついい方向に変化している、そのスモールステップの変化に、粘り強く向き合っていくことの大切さが伝わってきました。



## 小学生（高機能児）へのグループ支援～さくらグループの取り組み～ 市川市子ども発達センター 守屋塩子 氏

守屋氏からは、市川市の発達センターで行われている「さくらグループ」の取り組みを報告していただきました。H22年にスタートしたモデル事業で、幼児期に発達センター（あおぞ

らキッズ）で支援を受けていた、小学3年生までの通所学級在籍の児童が対象となっています。

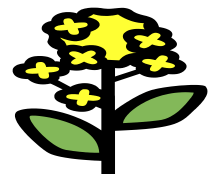
子どもへの支援では、「視覚支援」「先の見通し」「仲間と一緒に」「成功体験」がキーワードになっていました。H22～25年の取り組みから以下の点が報告されました。

- ① 子どもたちは、「わかる、できるが、楽しい」ということ  
…年齢やIQに関係なく、子ども達にとっては、自分で自分のことができるということが何よりも楽しく、自信につながっていく。評価が不十分だと、子どもたちは何の楽しさも感じることなく、大人の満足だけの取り組みになっている可能性が大きい。複数の目によるフォーマル・インフォーマルな評価が大切。
- ② 理解者がいれば、「楽しい」ということ  
…「子どもを変える」のではなく、子どもの好きなこと、得意なところを伸ばしていくという視点で、手取り足取り教えていくために、支援者側の「私たちが」常に学び続ける姿勢に変わることが大事。
- ③ 楽しさが、人を育てる」ということ  
…興奮状態は「楽しさ」ではないことに注意。また、つらい場面で「がんばろう」というよりも、子ども達は、楽しさがあれば自分から手をだしてくる。楽しい気持ちがやる気を育み、楽しむ中から学ぶことができる。支援者がいかに「楽しさ」を作り出せるかである。

さらに、TEACCHプログラムについて、市川市の公立小中学校の通常級では、「スモールステップ」や時間・場の「構造化」の考え方が、ユニバーサルデザインとして導入されているという報告がありました。子ども達の自己肯定感を守り、自信を育てていくという点からも、ASDの子の心を育てるためには、構造化が必要であるとの考えで発表を締めくくられました。

### 《コメント》（運営委員 金坂）

具体的なエピソードから、子どもの気持ちを丁寧に汲み取って支援に活かしていることがよくわかりました。通常学級にいる、困っている子ども達は、さっきは言えた言葉でも場面が変わると上手く言えなかったり、そのために手が出てしまったりしています。また、その子を支える先生方も悩んでいます。ぜひそこに守屋先生の取り組みをつなげていってほしいと思います。「わかる、できるが、楽しい」ということ、その「楽しさが、人を育てる」ことは、明日からの支援に早速活かしていきたい視点です。





## 施設における実践から まほろばの里 瀧澤多恵子 氏

就労継続支援B型の事業所のまほろばの里からは、Yさんという一人の利用者さんをめぐる取り組みについてご報告いただきました。

作業意欲が感じられず、机や資材、窓枠の上に登る等の危険な行為をしては、周囲からの注意の言葉かけによって、さらに行為を増長させているYさん、脅迫行為とも思われる行為も見られました。また、他の利用者さんが嫌な思いをするような場面も出てきました。なんとかいい方向に向かいたいという同じ思いの下、全職員で取り組んでいきました。

行動観察でYさんの行動を評価し、全職員アンケートからYさんの行動の表す意図の仮説をたてました。その仮説に基づいて、言葉かけの際の単語1つに至るまで、全職員が意識統一をして支援を行いました。全職員の支援が統一されることは、Yさんにとってもわかりやすく、目の前にある課題に一生懸命に取り組む姿勢が見られるようになったり、適切なコミュニケーションがとれていることで、危険な行為が減り、注意も伝えやすくなったり、という変化が見られました。「ご本人の行動の意味をどう捉えるか」「問題行動の本当の原因はご本人ではなく、環境や支援の方法ではないか」ということを中心に置き、評価→仮説→実践→評価→仮説→実践…と、全職員の共通理解の下で再構造化を繰り返しています。

### 《コメント》(運営委員 島田)

利用者さんの評価と支援者側の評価の両方が行われていたことがすばらしいと思います。アンケートや映像資料から、Yさんの行動の意味の共有が図られていました。一つ一つの行動を客観的に評価し、事業所全体で共通認識をもつことが大切だと改めて感じました。一人の利用者さんに対して、いい意味で全職員を巻き込んで取り組んだことが、統一した支援につながっていました。チームとしてYさんを支えるんだ！という意識の向上が感じられる実践です。



## 出前トレセミ、その活用 ～実践しよう！～ 八日市場特別支援学校 西村則子氏 伊藤雄太氏 岸本恭子氏

八日市場特別支援学校からは、H25年度の夏に行われた「出前トレセミ」とその後の実践について発表していただきました。

自閉症の人たちがハッピーな生活をするために、乳幼児から成人まで、同じ視点で支援をつなげていくことが大切です。本当につながっていくためには、障害の理解と適切な支援の基本を支援者すべてが知らなくてはならない、それを学ぶ機会としてTEACCHプログラム研究会で考えた一つの方法が、この「出前トレセミ」です。

「出前トレセミ」は、学校で企画した研修会にT研のスタッフがボランティアで協力し、T研の教材を貸し出すという形で行ったものです。H25年度は、県立東金特別支援学校、市立船橋特別支援学校、県立八日市場特別支援学校の3校で行いました。その他、八日市場特別支援学校を会場として、旭市自閉症協会主催でも行いました。各地域の学校を会場として行うので、受講者にとっては、距離的にも金銭的にも参加しやすいこと、協力児にとっては、家から近く、慣れている学校なので負担が少ないことが出前トレセミの良さの一つです。さらに、各地域で行うので、受講後もスタッフや受講者同士のつながりがもてる→支援が広がりやすい→支援がつながりやすい、というメリットもあります。

「出前トレセミ」の内容は、T研で行う2daysのトレセミに準じています。特に、グループごとの評価とワークシステムや自立課題の再構造化については、実際にやってみながらグループ内でお互いに意見を出し合い変えていくという過程に繰り返し取り組めることがポイントです。

そして、出前トレセミでの研修を実践に生かして、やってみる→子どもに合わせて再構造化する、という一番大事なところに取り組んだお二人の実践が報告されました。

伊藤氏からは、「出前トレセミ」での学びを生かして作った、たくさんの自立課題を写真を使って紹介していただきました。

協力児Aさんの担任として「出前トレセミ」に参加した岸本氏からは、Aさんだけでなく、学級全体で取り組んだ様子を映像を交えてご報告いただきました。

### 《コメント》(代表 長澤)

1年目と2年目の先生方が、こども達への支援を楽しんで行っている、ということが「出前トレセミ」の成果ではないかと思います。「私たちの手でもトレセミができる」ということが実現されたよい実践です。

# 安倍陽子先生の「ティータイム」



今年は寒い日が続き、冬が長かったです、ようやく春が訪れたという感じですね！花々が一斉に咲き始め、緑の美しい季節になり、ほっとしています。今年もこの美しい季節に、今年度のT研を始められますことを心から嬉しく、会員の皆様へ感謝を申し上げます。

今年、私たちのT研は12年目に入りました。まずは、今年度のT研のプログラムのご紹介から。今年度は、昨年あまり出来なかった、実践セミナーを充実させていきたいと思っています。

評価ツールである青年・成人向けTTAP講習は6月に、幼児・学童向けPEP-3講習は10月に、そして協力児・者が参加して下さり、グループで学び合う2デイズ自閉症療育セミナーは7月に行います。皆様、今年度は、是非椅子に座って講義を聞くだけではなく、アクティブに、自閉症支援を学び、日々の支援に役立てていただければと思います。例年通り、5回の講演会（前半は基礎編、後半は実践・応用編です）と最終回は、講演を聴いた方々からの実践発表会を行います。今年度も楽しみにしててください。

さて、この「ティータイム」のコーナーは、千葉のT研のことを中心に、個人的なことも書かせていただいています。今年度もどうぞよろしくお願い致します。

ここからは、個人的なことを少し。私は、この3月にNC（ノースカロライナ）に行き、アルバマールという町にある自閉症支援を見学し、その後チャペルヒルTEACCHセンター（TEACCHセンターの中での中心的センター）で研修をしてきました。早いもので、私が以前NCに住んで、1年間研修生をしていた時から、ちょうど20年が経過しました。研修生をしていた当時は、TEACCHの創始者であるエリック・ショプラー先生がお元気で、奥様でセラピストでもあるマーガレット・ランシング先生ご夫妻のご自宅に訪問したこともあり。ショプラー先生はとて気さくな方で日本酒を召し上がり、ランシング先生はお料理上手でご馳走して下さい、素敵な思い出として心に残っていますが、そのお二人が、チャペルヒルTEACCHセンターの玄関の写真の中で微笑んでいるお姿を拝見し、20年という年月を感じずにはいられませんでした。

さて、チャペルヒルTEACCHセンターでの幼児の個別指導やグループ指導を見学して、印象に残ったことを一つ、二つ。場所の作り方や、スケジュールやワークシステムの表し方は、私たちが学び、現在行っていることと変わらないと思いましたが、親御さんがいかに日常生活の中で子どもを支援していけるかという視点で、個別もグループも積極的に子どもの指導に参加していただき、セラピストが関わっていたことです。20年前も、個別指導の中で、親御さんを指導しているのを研修しましたが、グループ指導の中で、それぞれの親御さんが活動単位で指導者の役割をしているのは初めて拝見しました。また、小さいときから、コーピングスキル（ストレスに対する対処方法）を教えていこうとしているのだと思いますが、子どもが出来るヨガや呼吸法を教えていたことです。質問をする時間がなく、残念だったのですが、他にも色々参考になることがありました。

今年度も総会の後に、佐々木先生からお話を伺えますことを幸せに思います。どうぞ、ご質問もご用意下さいね。先生は、快くお答え下さると思います。皆様、今年度もご期待下さい！！

## （TTAP（自閉症のある青年成人の評価）実践セミナーのお知らせ）

日時：6月14日（土）9:45-17:00（受付開始9:30）

内容：TTAPの検査及び評価の実習

講師：中山 清司 氏（NPO法人自閉症eサービス理事長）

場所：きぼーる13階 会議室2・3（千葉市中央区4-5-1）

参加費：会員8,000円 非会員12,000円 定員：14名（申し込み多数の場合は抽選とさせていただきます。）

申込方法：5月31日（土）までに専用申込用紙を事務局までFAXにてお送りください。

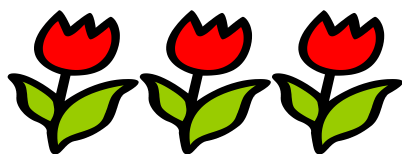
## （平成26年度 TEACCHプログラム研究会 第2回連続セミナーのお知らせ）

日時：7月19日（土）14:30-16:30（受付開始13:00）

場所：きぼーる13階 会議室1・2・3（千葉市中央区4-5-1）

講師：門 眞一郎 氏（京都市児童福祉センター）

「コミュニケーションについて」（仮題）



（編集後記）平成26年度の千葉T研セミナーが始まりました。組織の力を高めていくためにも、一人でも多くの仲間と誘い合って、共に学んでいきたいと思っています。（岡村）